

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第 796 号 平成 26 年 9 月 1 日

力のある学校（3）

東京大学教育学研究科・学校臨床総合研究センターでは、2000年（平成12年）に「学力問題プロジェクト」を立ち上げ、2001年度（平成13年度）の後半に学力問題に関して関西調査と関東調査という2つの調査を実施しています。

この内、関西調査を担当したのが、現在大阪大学大学院教授をしている志水宏吉氏でした。

志水教授によると、この調査は、1989年（平成元年）に大阪大学の池田寛教授を中心とした研究グループが行った、大阪府下の同和地区を有する学校を中心とする数十の小中学校を対象とした学力・生活実態調査をベースに、その追調査という形で実施したとしています。

志水教授は、この調査の結果明らかとなった知見として、

- ① 子ども達の「基礎学力」は着実に低下している
- ② それは、子ども達の生活・学習状況の変化と密接に関連している
- ③ また、子ども達の学力には「分極化」の傾向がみられる
- ④ それは、子ども達の家庭背景と密接に関係している
- ⑤ しかしながら、そうした「学力低下」や「格差の拡大」を克服している学校が確かに存在している

の5項目を上げると共に、「①から④の結果が明らかになった時、いささか暗い気持ちになったのだが、一つの小学校と一つの中学校において、調査結果の数値が非常に望ましいものとして浮かび上がって来た」と驚きを持って述べています（同氏著「公立小学校の挑戦」から）。

この2つの学校は、松原市立布忍小学校、松原市立松原第三中学校で、「これらの学校では、地域的、家庭的にはそれ程恵まれた状況にあるとは考えられないものの、子ども達の学習態度は意欲に溢れたものとなっており、その基礎学力の水準は極めて高いものとなっていた」と評価しています。

このような学校の事を欧米の研究では「効果のある学校」と呼ぶというのは、前回の塾頭通信でも紹介したところです。

貧困等劣悪な環境にある子ども達に対しても、学力格差を押さえ込み、子ども達に必要な学力を身に付けさせている学校の存在とその教育実践は、我々に大きな希望を抱かせてくれます。

志水教授は、大阪府下の学力で成果を上げている学校の実態をつぶさに観察する中で、「怒る授業」「徹底した学力保障のシステム」「教員集団のまとまり」に驚いたといいます。

「怒る授業」というのは、子ども達の目線にまで下がり、こちらの感情をぶつける事で彼らの態度変容を迫るというものです。「怒る」という事に対しては疑問の声もあるかも知れませんが、志水教授は、「多くの子ども達が適切な自尊感情を育てていない現状を踏まえ、真剣で深い情緒的な関わりを持とうとする先生の姿がそこにあった」と述べています。

そして何よりも重要な事は「徹底した学力保障のシステム」でしょう、情緒的なつながりに寄りかからず、「宿題を中心とする家庭学習の充実、習熟度別授業の継続的实施、放課後や長期休業中の補習学習、頻繁な学力テストによる子ども達の学力状況の常時モニター」等に積極的に取り組んでおり、当時志水教授は、ここまでやるのかとの感想を持ったと述べています（同氏著「つながり格差が学力格差を生む」から）。

志水教授は、大阪での調査結果を基に、日本における「効果のある学校」について研究を進め、その成果として「しんどい子に学力を付ける7つの法則」を明らかにしています。

- ① 子どもを荒れさせない
- ② 子どもをエンパワーする集団作り
- ③ チーム力を大切にする学校運営
- ④ 実践志向の積極的な学校文化
- ⑤ 地域と連携する学校づくり
- ⑥ 基礎学力定着のためのシステム
- ⑦ リーダーとリーダーシップの存在

この7つの法則は、「効果のある学校」作りの法則ともいえるものですが、大阪府下の教師と議論した際、現場の教師からは、

「効果という言葉は少し冷たい」

「テストの点数を上げるためだけにやっているわけではない」

「しんどい層だけでなく、すべての子どもが大切」

といった様々な意見が出されたそうで、志水教授は「効果のある学校」という表現を「力のある学校」に、いわば看板の掛け変えを行っています。

「効果のある学校」が、学力を引き上げるための効率性を求めているのに対して、学校教育が学力の向上はもとよりもっと多様なものである事を考えれば、「力のある学校」というネーミングの方がより適切だろうと、私も思います。

志水教授は、この「力のある学校」とは、「すべての子ども達をエンパワーする学校の事である」と位置付けています（同氏著「公立小学校の挑戦」から）。つまり、

一人ひとりの子ども達の成長を、組織力の全てを使って全面的に支援する、そのために力を発揮している学校というのが「力のある学校」という事になるのだと思います。

志水教授は、「力のある学校」では、学力のみならず学校生活の各側面で子ども達は自らの力を十二分に伸ばしており、先生方も生き生きと職務に打ち込んでいる(同氏著「つながり格差が学力格差を生む」から)」と述べています。私は、そうした「力のある学校」が例外的な存在ではなく、普通に見られるような北海道になって欲しいと切望していますが、果たしてそう実感出来る日は、何時になったら到来するでしょうか。少なくとも、見果てぬ夢でない事を祈っています。(塾頭：吉田 洋一)